

油彩

(テンペラ併用)

開講にあたり



再生一月 変150号 1994年 油彩・テンペラ



朝の供物 P50号 1991年 油彩・テンペラ

三浦明範の静物画講座

みづらあきのり 1953秋田 東京学芸大学卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館
油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画ビエンナーレ、日本の絵画新世代展、両洋の眼現
代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品 文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在'96
'97) 春陽会委員

今月より「静物画」の講座を担当させていただく事になりました。このお話を頂いた時に、私自身としては「静物画」を描いているという自覚がなかったので、何故という気持ちがありました。しかし、担当の方々より、普段の制作で、という有難いお言葉をいただきましたので、引き受ける事にしました。

「静物画」というジャンルは、歴史的には17世紀ごろから始まりですが、実は人物画であろうと、風景画であろうと、本質の部分では全く同じものであり、対象の大小、遠近、生物・非生物、などの些細な違いではありません。したがって、私は私のスタンスがどこにあるかという事は、ほとんど考えたことがないのです。一般的には、視点の位置から「静物画」というジャンルが近いだろうとは思いますが、その中で人物も風景も取り入れていますので、一言で括れる言葉がないということなのです。

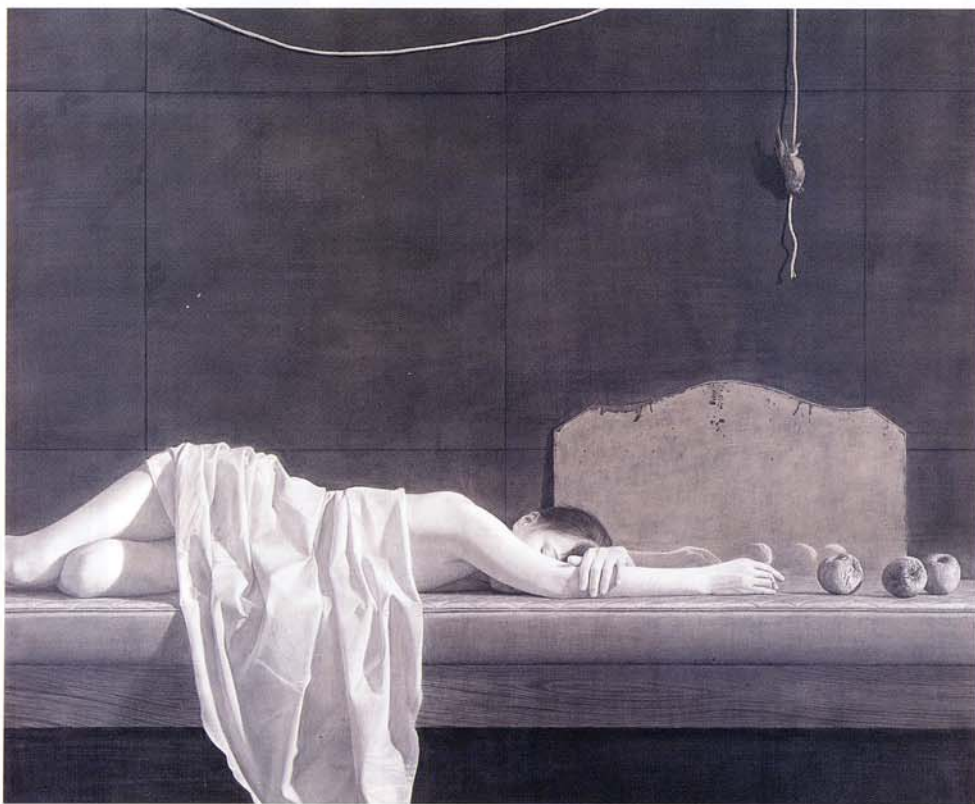
模写 ヤン・ファン・アイク マルガレータ・ファン・アイクの肖像
1997年 油・樹脂・膠のエマルジョン



11月の祭壇 F30号 1990年 油彩・テンペラ



朽ちた果実 F130号 1998年 鉛筆・墨・黒鉛



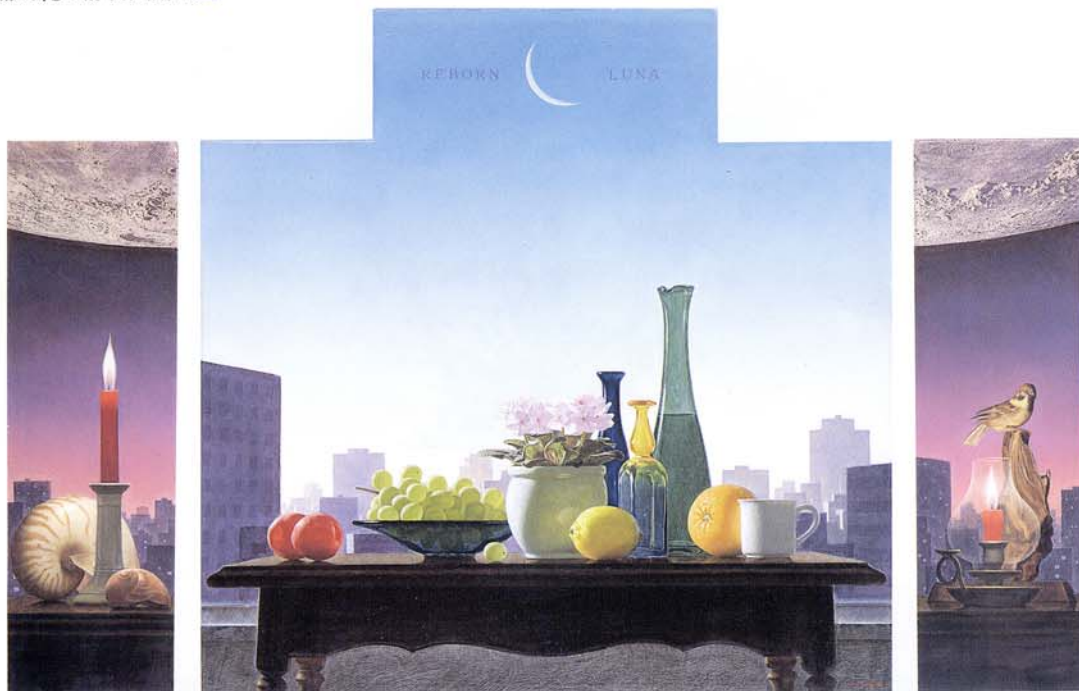
取りも直さず、絵を描く上で最も大切な事は、このようなスタンスの問題ではなく、さらに言うところでも、立体感でも、質感でも、ましてや技術でもありません。「感動」です。描いた者が感動していかなくて、誰が感動できるでしょうか。

もちろん感動の方法論など、あろうはずありません。したがって、ここでは感動の表現手段を著す事になると思いますが、常に原点である感動に立ち返る事を、私自身を含めて心がけていきたいと思っています。

それともう一つ、私が現在使っている技法は、「油絵」という言葉ではこれもまた括れないジャンルなのです。具体的にはこれから順を追って説明していく事になると思いますが、とりあえず今回は、テンペラと油彩の併用とのみ言っておきます。

ところで、「油絵」は、15世紀のフランドル地方(現在のベルギー)から発祥しましたが、ヴァザリリの著「美術家伝」(1550)の記述によって、ファン・アイクが「発明」したものと、長い間信じられてきました。(現在は、完成者という事になっていない)

しかし、彼の技術は、いわゆる



再生一白い月 中央80.3×80.3、左右65.0×20.0cm 1993年 油彩・テンペラ



朝の儀式 F100号 1991年 油彩・テンペラ

油絵具のみでは説明できない技術であったため、その秘密を解き明かそうと試みるものが、後を絶ちませんでした。

その代表的なものの一つが、琥珀を溶かしたワニスを使ったのだという説。琥珀は最も硬い化石樹脂で、その透明で堅牢な性質が絵画にとって理想のものだったからです。

ベルギーの絵具メーカーであるBROCKS社からは、この琥珀のワニスと称するものが製品化されています。(現在では、琥珀の特性を保持したままの溶解は不可能とされています)

また、マロジェの油脂と水性膠のエマルジョン(油脂分と水分の乳濁液)説、ジロテイの単に揮発性油を使ったのだという説、あるいは、デルナーのテンペラと油彩の混合技法説など、多様な仮説があります。

私はこの油彩画の黎明期に興味を持ち、一昨年から一年間、ベルギーに滞在しました。そこで、多くの研究書や、修復報告などを参考にして、ヤン・ファン・アイクなどの横写をしてみました。

(108ページ図版参照)

この横写は、油・樹脂と膠を使った絵具で描きましたが、正解か



彼方へ F150号 1996年 鉛筆・墨

〔みうらあきのり略歴〕

- 1953 秋田県に生まれる。
- 1976 東京学芸大学卒業。卒業制作賞上。春陽展出品(以降'97年を除き毎回)。
- 1980 春陽展新人賞受賞。文化庁主催現代美術展に出品。
- 1981 '81年東京セントラル美術館油絵大賞展に出品。
- 1982 第17回昭和会展に招待出品(日動サロン)。個展開催。
- 1983 文化庁芸術家国内研修員として歌田真助介氏に師事。第18回昭和会展に招待出品。
- '83東京セントラル美術館油絵大賞展に招待出品。春陽会会員に推挙。
- 1984 第19回昭和会展に招待出品。第27回安井賞展に出品。
- 1985 日中文化交流展に出品(台北・国立歴史博物館)。第28回安井賞展に出品。第1回具象絵画ビエンナーレに出品(鎌倉近代美術館他)。個展開催(銀座・東京セントラル美術館)。
- 1986 第29回安井賞展に出品。
- 1987 アート・フェアに出品(スイス・バーゼル)。日本の絵画新世代・1987展に出品(上野松坂屋)。個展開催(池袋西武ガリアテラ特美術館)。
- 1988 第31回安井賞展に出品。個展開催(静岡西武、西宮つかしん、船橋西武)。個展開催(銀座画廊宮坂)。第1回復洋展に出品(日本橋三越、以降毎回)。
- 1989 アート・フェアに出品(スイス・バーゼル)。日本の絵画新世代・1989展に出品。
- 1990 個展開催(銀座新生堂、池袋西武美術館)。熱き潮YOKOHAMA'90s展に出品(横浜高島屋、以降毎回)。
- 1991 両洋の眼・現代の絵画展に出品(日本橋三越)。春陽展・第68回展賞受賞。アート・フェアに出品(ニューヨーク)。日本の絵画新世代・1991展出品。21世紀への証言展に出品(銀座東京セントラル美術館)。個展開催(銀座東京セントラル美術館)。
- 1992 個展開催(広島アルパーク天満屋)。早月会展に出品(日本橋三越)。21世紀の旗手—日本の絵画展に出品(オーストラリア・マンリー、上野松坂屋他)。個展開催(銀座彩林堂)。
- 1993 第36回安井賞展に出品。個展開催(銀座東邦アート)。21世紀の旗手—1993展に出品。21世紀への証言展に出品。
- 1994 21世紀の旗手—1994展に出品。
- 1995 個展開催(日本橋・オンワードギャラリー)。
- 1996 文化庁芸術家在外研修員として、ベルギーに滞在。(〜'97)。今日の巨匠達展(ベルギー・ブリュッセル)。ライン・アートに出品(ベルギー・ケント)。
- 1998 個展開催(日本橋三越)。

否かは「神の味噌汁」、否「神のみぞ知る」ということです。決して、古の巨匠たちが現在より優れた材料を使ったということはないのです。彼らに学ぶべきはその使い方にほかなりません。素材の性質を熟知し、長所は最大限に引き出し、欠点は補うという使い方方をわきまえていたのです。今日、画材店で、いろいろな絵具やその他の画材が簡単に手に入ります。しかしその反面、それらの成分や性質は、知らされないまま使っているのではないのでしょうか。

また、これら市販されている

絵画材料が、果たして自分の表現に総て合致しているのかという点、必ずしもは肯定できないかもしれない。ある部分では、画材の方に合わせている事もあるかもしれないのです。優れた作品は、表現と材料(マチエール)が一致しているのです。その意味でも、この講座では、材料にもこだわっていきたくと思っています。



アトリエでの三浦先生